

柳川先生の initiation

四方田 犬彦

(昭和51年卒業)

はじめて柳川啓一教授の宗教学講義に出席したのは、1973年の5月、教養学部のある駒場の階段教室であった。教養課程のために春からの前学期を柳川先生が、秋からの後学期を今は退官なされた脇本平也先生が担当されることになっていた。受講者は何人くらいいたのだろうか、いつも教室に顔を出す学生は3,40人くらいだったと記憶する。

授業のはじめに、柳川先生は黒板に一言、*initiation*と書かれ講義のためのノートの頁を捲りはじめられた。わたしも、わたしの近くにいた同じクラスの学生たちも、それが何の意味の言葉なのか、わからなかった。隣にいた鶴岡賀雄だけが、何か手掛りをつかんでいるようだった。あれは*initial*という単語から派生しているから、始めとか入門ということだ。きっと宗教学の入門という意味なのだろう、と彼がいったので、周囲は、あなるほどと納得した。

*initiation*とは社会的な地位の移動にともなっておきる儀式のことで、ふつう通過儀礼とか過渡儀礼と訳しますといわれながら、先生はファン・ヘネップの学説を紹介された。こうして講義が始まった。日本人は死んでもすぐには死なない。33年たってはじめて死者として成長し、御先祖様となる。柳田の説くこうしたプロセスも一種のイニ

シエーションでしょうね、と先生がさりげなくいわれた言葉がひどく印象に残った。わたしのまったく知らない世界の発見だった。柳川先生の講義は文字通り知的世界への通過儀礼となったのだ。

古い講義ノートをひっぱりだして読み直してみると、この学期には、通過儀礼論、犠牲論、前論理説、宗教におけるドラマ性、宗教における矛盾の問題、アイデンティティー論を教えていただいたことがわかる。毎週毎週、パノラマ館のように新しい世界が開かれてくるようだった。わたしは夏休み中かかって、フロベールの『聖ジュリアン伝』と光明皇后の施薬院の挿話を比較して、レポートを書いた。

73年は多くの意味でモニュメンタルな年だった。せりか書房からバフチンのラブレー論が刊行され、エリアーデ著作集の刊行が始まった。そのパンフレットに柳川先生が推薦文を書いていらっしゃるのを発見したとき、わたしは天動説論者にでもなったかのような興奮を覚えた。そして冬には大部の宗教学辞典が東大出版会から刊行された。こうした知的刺激を矢継早に受けて、どうして専攻に宗教学を選ばないわけがあるだろうか。なんと翌74年度には15人の学生が本郷の研究室に大挙して押し寄せるといふ、前代未聞の事態が生じたのである。

わたしは猿の部屋という仇名のあるゼミ室で2年間で宗教学の手解きを受けたあと、駒場に戻って、比較文学の大学院でユートピア文学の勉強にとりかかった。同期の大学院生がはじめて出会ったエリアーデとかレヴィ＝ブルユールといった名前をこわごわ口にしなが、文学の神話原型論的分析にとりかかろうとするのを、ちょっぴり得意気な気持ちで見ている。ひとつでも相手の知らない固有名詞を知っていることが、絶対的な矜持の根拠たりうるといった時期があるものである。わたしはといえば、そのどれもが柳川ゼミで慣れ親しんできたものばかりだったのだ。

もし街角で人がピラを配っていたら、かならず受けとって内容を読んでおくように。それが新宗教のピラだったら、保存しておくように、と柳川先生はおっしゃられた。日本の新宗教研究のゼミの冒頭でのことだ。わたしがイギリス文学、フランス文学、あるいは上古と近代といったふうに講座別の発想で文学的テキストをとらえる文科系の狭小な悪癖にとらわれず、またテキストの属する文化の位階秩序によらずに多少なりとも物を読む

ことができるとすれば、そんなわずかな期間ではあったが宗教学研究室で学んだという体験から来ていると思う。一枚の新宗教のピラも、高度に洗練された哲理教典も、民間伝承も、前衛小説も、すべて書かれたものとして均等であり、思考の対象となりうるという確信を教えられたのは、柳川先生からであった。

そういえば、はじめて本郷の宗教学科の研究室を訪れたとき、当時助手であった洗建さんが、部屋という部屋を紹介してくださったことがあった。十数人の新入りたちは古寺旧跡をめぐる観光客のようにゾロゾロと洗氏の後に従って歩いた。ここが柳川先生の机ですと教えられた机のうえには、隙間もないほどにびっしりと書物とノート、書類のたぐいが(さまざまな方向を向いて、思い思いに)積み重ねられていた。今思い出しても壮絶な光景だった。それは単なる乱雑さを通りこして、どこかしらルネサンス期の戯画に登場する、サチュルナリアを主題とした静物画を連想させた。多忙の主不在のまま、机のうえで静かな祭りが演じられていたのである。